教育委員会だより

～学校教育推進の重点（学校別紹介）～

第8回『浅野小学校』

『豊かな心を育み、創意工夫に満ちた活動を展開し、主体的に生きる児童を育てる』

本校の児童は、とても素直で心の優しい子ども達です。

この子ども達を守り育てるために、命の尊厳と安全で安心な学校づくりに努めること、豊かな心を育み主体的に活動する子どもを育てることを基盤に、充実した教育活動の推進に努めています。

特に、子どもを取り巻くさまざまな事件等の背景に鑑み、心の教育の重要性が問われています。本校では、道徳教育・人権教育・福祉教育の充実はもとより、本年度より「心の花畑」運動を展開し、その基盤づくりに努めています。

●お世話になっている方々への感謝の気持ちを示す会や友達の良さを全員で認め合い、共有し合う活動

●毎日の動物の世話や、種から育てる全校生の一人一鉢運動（命を育む活動）

●ボランティアの重要性・必要性を体得する福祉体験活動

●協力性を高める、縦割り集団の清掃・整備活動

●友達の良さを認め合い、小さな親切を展開する「思いやりの木」等の活動

このような活動を通して、今後、さらに豊かな心の輪が広がるよう、創意・工夫を凝らした活動を展開していきたいと考えています。

また、浅野小学校は素晴らしい環境に恵まれています。この環境も、豊かな心の醸成に大きく貢献しているものと思います。

戦時中に修学旅行に行けなかった子ども達の心を少しでも和ませようと、保護者の方が植えられた由緒ある桜並木。現在では、老木となった桜も多く、「梅の木カビ」と「天狗巣病」、そして枯れ枝に悩まされていますが、保護者の方々や樹木医の宮田和男さんにもお世話になりながら、数多くの卒業記念樹とともに環境整備を行っています。

毎年、年度末に地域をあげて開催されている「桜まつり」においても、美しく咲き乱れた桜の木の下で、地域と一体となって温かい心の輪を広げる活動を展開しています。

今後も、子ども達の命を育む活動を推進するとともに、自然に恵まれた教育環境整備に努めつつ、心に響く教育活動に全力を注いでいきます。

（学校長　室見邦男）

登下校でお世話になっている方に感謝
（1学期の「心の花畑」集会）

まちの文化財㉘

～青谿書院と池田草庵～

青渓中学校の青渓という名称は、青谿書院に由来しています。青谿書院は、弘化4年（1845）、池田草庵が35歳の時に宿南に開いた漢学塾です。青山川の渓谷沿いにある書院という意味で、塾舎は茅葺き木造2階建ての建物です。

草庵は、ここで明治11年の66歳まで、673人の生徒に陽明学や朱子学という学問と精神修養を実践して教えました。豊岡藩17名、多度津藩21名をはじめ、出石藩や平戸藩などの武士の子弟や、但馬の人が多数入門しました。

草庵の門人には、京都府知事を勤めた北垣国道、東京大学総長を務めた浜尾新（あらた）、文部大臣を務めた久保田譲がいます。さらに郷里の教育に尽力した和田山・自成軒の安積利一郎、豊岡・宝林義塾の久保田清一、八鹿・山陰義塾の北村寛慤や斉藤哲太郎がいます。

池田草庵の2つの出来事を紹介しましょう。嘉永4年（1851）、江戸幕府の昌平坂学問所の儒官である佐藤一斎を訪問して数回の講義を受けました。このことから草庵は、一斎の門人ともいわれます。一斎の学問姿勢を物足りなく感じましたが、ここで呉康斎集という書物を書写し、生涯を通じてこの本を研究し実践しました。

嘉永5年、草庵の友人である宇都宮藩郡奉行・岡田真吾の推薦で藩の儒学者への就任依頼がきました。用人の待遇が与えられ、藩主と対面して教え、年収は200石にもなります。宿南に帰る往復の旅費も保証されました。しかし、「名声や金銭があっても学問はできない。清貧に甘んじて生き方を探り、郷里の人材を育てる」という理由でこれを辞退しました。

日本と但馬の近代教育の推進者を育てた池田草庵の功績は大きなものです。多くの文物が県指定文化財として保存されています。

（社会教育課）